

調査報告

黒田清輝筆《夕風》について

About *Yunagi* (Evening Calm) Painted by Seiki Kuroda

結城 唯善 / Tadayoshi YUKI

要旨

近代日本洋画の父と称される画家・黒田清輝(1866-1924年)による作品として、新たに確認された油彩画《夕風》について調査を行った。画中に描かれた風景事物から該当写生地を推察して実地探査をし、『黒田清輝日記』の記述を中心に精査して、その制作年や取材地、初出展覧会を推定した。本稿では、《夕風》の作品調査の経緯及び結果を中心に詳細を報告する。

キーワード： 黒田清輝 洋画 近代美術 風景画 三越

提出年月日：2023年2月28日 受理年月日：2023年2月28日

1. はじめに

大な功績によって「近代日本洋画の父」と称されている。

図表1 黒田清輝《夕風》個人蔵



18歳で法律を学ぶために渡ったパリにおいて画家の道に進むことを決意し、当地の画家ラファエル・コランに入門し、近代フランスのアカデミックな絵画教育や美術潮流を学び帰国。光を重視した清新な画風は、その後の洋画壇に多大な影響を与えた。以後、西洋美術の移植と世界に通用する日本洋画の確立に尽力した。黒田の画業は、開明性に貫かれたものであったと評されている¹。

油彩画《夕風》(図表1)は、黒田清輝の作品として近年新たに確認されたものである²。本稿は、画中に描かれた風景事物から該当写生地を推察して実地探査を行い、『黒田清輝日記』³の記述を中心に精査し、推定された制作年や取材地、初出展覧会等の調査結果を中心に報告するものである。

1866年、薩摩藩士の家に生まれた黒田清輝は、急速に近代化をすすめる明治、大正という激動の時代の中で、新しい美術思潮を我が国にもたらし、画家としてのみならず、教育者、行政官として近代日本の美術の礎を築いた。生涯のその多

2. 《夕風》の状態

2.1 画面

柔らかな光をうけて輝く海と遠い岬をやや高い視点から望み、手前の岩場には神社を含んだ集落、最近景にはごつごつとした岩肌が捉えられている。風いだ海や岩肌には、所々に鮮やかな赤や緑の彩色がなされている。現状、目視では絵具の油分はほとんど支持体に吸収されているものと思われる、表面のツヤ引けによって絵の色彩も描画時より幾分淡くなっているものと推察される。

2.2 支持体の形状及び額装

厚さ3ミリ、縦245ミリ、横336ミリの板に油彩で描かれている。保存状態は概ね良好であるが、画面右上の遠い岬から海の一部にかけてごく小さな黒ずんだ点状のシミが認められる。また、板は経年故にやや内側に反っており、木地の額縁に、裏側からビスで固定されている（図表2）。

図表2 《夕風》額装の状態



2.3 支持体裏面の状態

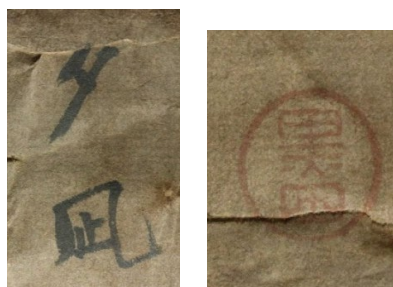
支持体裏面（図表3）は、上部に三か所のテープ跡が認められたことから、以前は板を額の内側にテープ止めしていた可能性が推測された。

裏面には、毛筆墨書により楷書体で「夕風」と画題が書かれ、篆書体で「黒田」と刻まれた朱文の丸印が捺された縦123ミリ、横36ミリの和紙の付箋が貼り付けられている（図表4）。筆跡はやや右上がり直線的な硬さが特徴的である。

図表3 《夕風》支持体板裏面



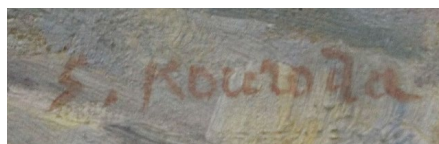
図表4 裏面付箋の題字及び印の拡大



2.4 サイン

《夕風》は作品表面右下に「S.Kouroda」とサインが書き込まれている（図表5）。

図表5 《夕風》表面右下サイン



3. 描写地と制作時期の推定

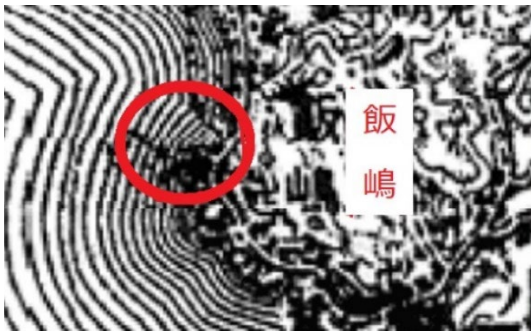
3.1 地理的特徴による推定

《夕風》は、集落の建築様式や鳥居を有す神社

の描写によって、日本国内の風景であると推察された。黒田清輝がフランスで油彩を学修し、帰国したのが1893年であるため、それ以降に制作された作品だと考えられる。さらに、画面上部の岬の特徴的形状から、遠景を神奈川県鎌倉市西部の「稲村ヶ崎」と仮定し、位置関係により、画面中央の小さな社は「神奈川県逗子市小坪5丁目13」の「白鬚社」と推定、実地調査を行った。

「白鬚社」については、『黒田清輝日記』1913年9月10日の項にのみ「三時半頃ヨリ飯島へ赴キ白鬚明神ヲ望メル風光ヲ写ス」との記述が確認されたことから、『夕風』はこの日に当地にて写生された可能性が有力となった。

図表6 埋め立て以前との比較 地理院地図⁴
(上：1903年測図 1911年10月21日発行
下：現在)



現在は祠のみが残る「白鬚社」は、1928年刊の『逗子町誌』⁵に「白鬚神社 祭神 武内宿禰、猿田彦大神。飯島の先端海中に突出せる磯の上に

あり、十数年前迄は山をなし森林ありしも今は風波に洗はれて一木もなし、只石の祠を残すのみ」と記載されている。《夕風》には鳥居などが描かれていることから、1923年の関東大震災により「風波に洗われる」以前の様子であると考えられ、状況は日記の日付とも符合した。また白鬚社のある岬付近の様子は1967年から開始された埋め立てにより関東大震災以前と状態が異なっていることも明らかとなった（詳細は後述）。図表6下地図「小坪(五)」は埋め立て地である。

図表7上の写真は推定写生地付近「小坪飯島公園」(逗子市小坪5丁目23-439-2)からの眺めである。稲村ヶ崎、突出した手前の岬の岩、草に隠れた白鬚社などの大まかな位置関係が《夕風》と一致している。下の写真は白鬚社の祠である。上写真の撮影地点は67年以降の埋め立て地であるため1913年頃は海であった。祠横の草が高く伸び、上写真の撮影地点から祠は見えない。白鬚社を俯瞰するためには更に高く引いた位置から見下ろさなければならないことが分かる。

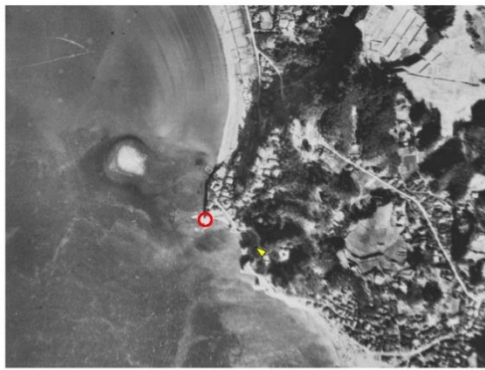
図表7 現在の白鬚社付近の様子
筆者撮影(2022年8月21日16時50分頃)



図表 8 「推定描画位置図」⁶



第一軍管地方二万分之一迅速測圖原圖 (明治15年5月)



USA-M53-A-7-35 (昭和21年2月) 国土地理院「地図・空中写真閲覧サービス」から

○白鬚社 ▲描画位置(推定)



飯島公園プールから推定描画位置付近を望む



推定描画位置近景

今回の調査にご協力いただき、図表8「推定描画位置図」をご提供いただいた逗子市教育委員会社会教育課長 佐藤仁彦氏による現地の専門家的知見によれば、『黒田清輝日記』1913年1月20日の項に《夕風》とは別作品と思われる記述ながら、「午前十一時頃小坪ノ崖道ヨリ富士ヲ望ミタル景ヲ描ク」とあることから、実際に写生した場所は、白鬚社や飯島の集落を見下ろすことができる少し高い場所に位置する「小坪ノ崖道」だと推定された。埋め立て以前は波打ち際であった切り立った危険な崖道(旧道)から、往時は江の島、稲村ヶ崎、富士山、白鬚社などを望むことができたものと推察される。

推定描画位置図に示された黄色矢印の地点は、崖の中腹にある旧道であり、現在は危険で近づけないため、現地を確認することは困難であった。

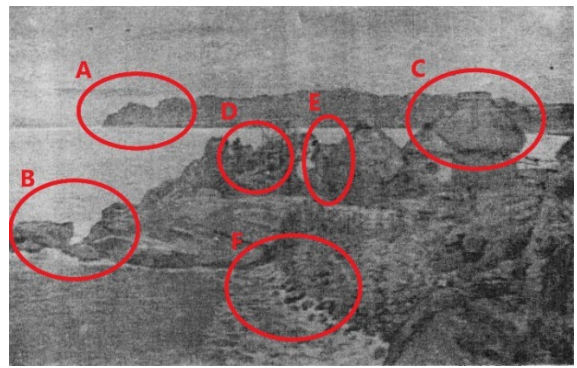
3.2 黒田清輝の他作品との比較

調査によって、《夕風》は、黒田清輝が1913年に「国民美術協会 第1回西部展覧会」に出品した《磯の夕》(図表9)⁷、1916年に制作した《鎌倉にて(小壺にて)》(図表10)⁸と描かれた要素が概ね一致することが明らかとなった。

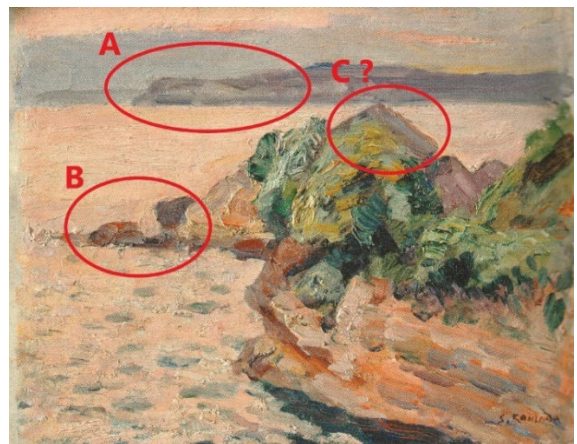
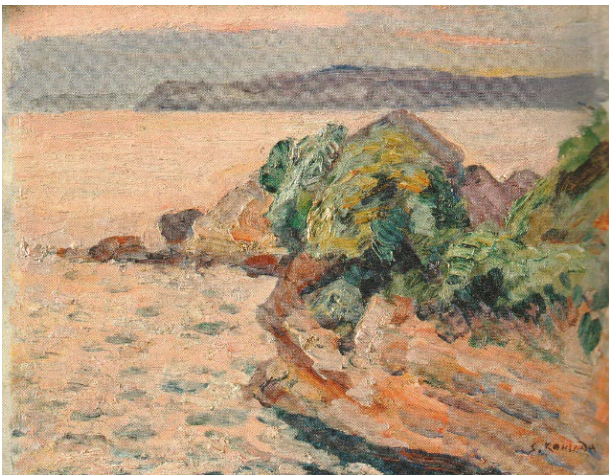
類似した三作品の画中の要素をそれぞれA~F点とし、比較したものが図表11である。観察地点による違いは見受けられるものの、A~C点の三箇所は三作共に一致し、D~F点は二作で凡そ一致した。また、《夕風》画面中央左に描かれた社と鳥居、海上に突き出た木々、隣接する家屋の一部などを《磯の夕》部分と比較検証したところ、各形状及び位置関係が概ね一致した(図表12)。樹木の状態が近似していることから、特に《夕風》と《磯の夕》は近い時期に制作された可能性が高いと考えられ、《磯の夕》制作同年の日記に記録された「白鬚明神ヲ望メル風光ヲ写ス」とした作品が《夕風》である可能性がより有力と

なった。

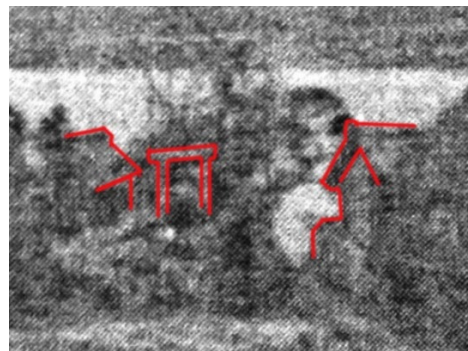
図表 9 黒田清輝《磯の夕》1913年



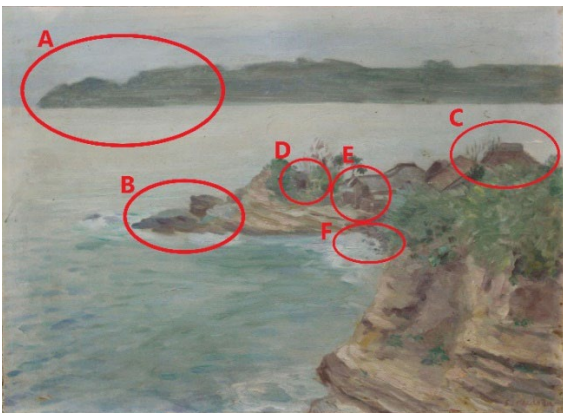
図表 10 黒田清輝《鎌倉にて(小壺にて)》1916年
東京国立博物館蔵



図表 12 《磯の夕》の社及び鳥居と家屋の輪郭線による鮮明化(上)と《夕風》部分(下)



図表 11 《夕風》《磯の夕》《鎌倉にて (小壺にて)》A~F点による比較



A-稲村ヶ崎 B-岬の大岩 C-家屋①大屋根
D-白鬚社 E-家屋② F-波打ち際の岩場



図表9《磯の夕》は、1913年10月4日から11月7日まで大阪天王寺公園内美術館にて開催の「国民美術協会 第1回西部展覧会」に《ダリヤ》《洗濯》と共に出品された作品である。この絵は、1917年に黒田自身の手で上から《栗拾い》(東京国立博物館蔵)を新たに描かれたとされ⁹、現存していない。画家の石井柏亭の展覧会評によれば、「珍しくも二十五號程の風景畫で、それは鎌倉小坪の海濱を寫したものであった。私は其後同地を踏んで見てそれが全く作爲なき實寫であることを認めた。それは多少弱い感じもあるにはあったが、沈着な灰色調の佳作であった」¹⁰という。

図表10《鎌倉にて(小壺にて)》は、『黒田清輝日記』1916年8月27日の項に「飯島ニ到リ小坪道ヨリ西ニ向ヒ一小図ヲ写シ」とあり、作品裏書の日付とあわせ同日に鎌倉市と隣接する逗子市の小壺(坪)にて描かれたとされている¹¹。《夕風》よりも小画面のこの作品は、白鬚社が見えない位置からやや俯瞰する引きの視点で取材されたものだと考えられる。

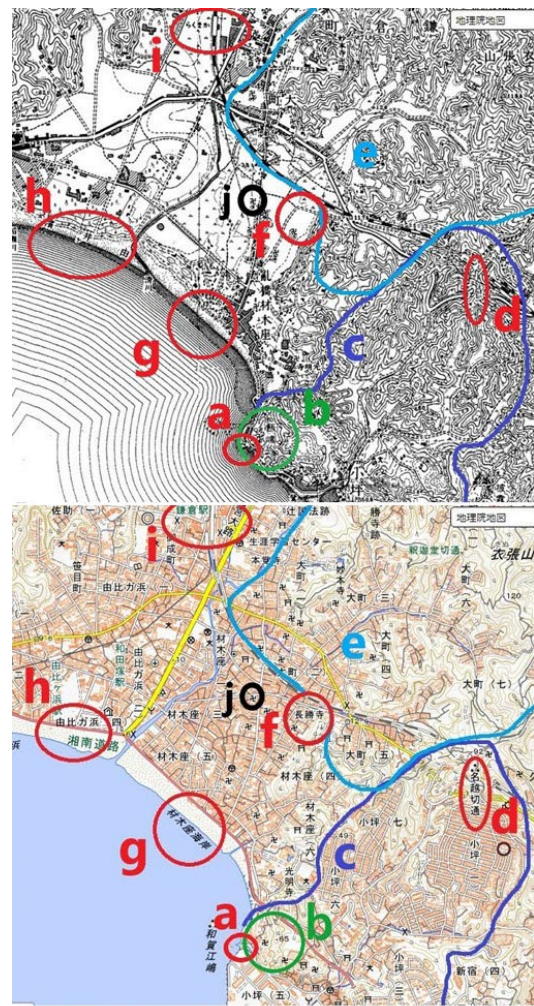
黒田は鎌倉に別荘を有しており、しばしば滞在し制作を行っている。白鬚社を描いたとする1913年夏の鎌倉滞在時の黒田の作品制作の動向は、『黒田清輝日記』に克明に記されているが、風景が描かれたと思われる作品は「飯島図」などと記述されている。ここではこの「飯島図」を《磯の夕》と仮定し、制作経過を検証することで、同時期に制作されたものと思われる《夕風》との関連を探った。

(1) 《磯の夕》と《夕風》

この時期の写生地となった「飯島」は、前出1928年刊の『逗子町誌』によれば「光明寺より南の方、漁村なり」とあり、古くは「頼朝寵愛の妾亀前」も居住していたとされる地である。1903

年測図の「地理院地図」(図表13上)では現在の「逗子市小坪5丁目」、同図b地点に地名(飯嶋)が確認できる。同地は1967年から埋め立てが開始され地形が変わり、現在は前出の「小坪飯島公園」などにその名が残されているのみである。

図表13 別荘周辺の位置関係 地理院地図¹²
(上:1903年測図 1911年10月21日発行
下:現在)を基とした関係地の位置関係図



a,白鬚社 b,飯島 c,小坪 d,名越切通
e,大町 f,長勝寺 g,材木座海岸 h,由比ガ浜
i,鎌倉駅 j,黒田別荘付近

『黒田清輝日記』において「飯島」が最初に言及されるのは1912年1月6日の項で、「飯島ニ鐘乳石ノ洞穴ニケ所発見セラレテ見料ヲ取ル可ク設

備整ヘルナドハ昨夏以来ノ事ニテ今日始メテ知りタリ」とある。

次に言及されるのは1913年9月3日の項で、これは《磯の夕》が「国民美術協会 第1回西部展覧会」に出品される直前の時期にあたる。そこには「四時頃内籠ニテ読書 夫レヨリ照ト珍ラシク小坪方面へ出懸ク 飯島ニテ小犬ヲ海へ投込ミタルヲ見テ助ケ連レ帰リタリ」とあり、「珍シク」とあることからこれまで「小坪方面」及び「飯島」へ出向くことはあまりなかったことが推察された¹³。

黒田がこの夏に滞在したと思われる別荘は、日記の記述などから「乱橋」の「啓運寺」より「四目垣ヲ隔テタルノミ」の場所と推測され(図表13 j 地点、図表14に詳細)、現在の「鎌倉市材木座3丁目1-20」の啓運寺付近にあったものと考えられる¹⁴。別荘から「小坪」の海沿い方面は「材木座海岸」(図表13 g 地点)などのより近辺の海辺に比べればやや離れた場所であることから、赴くのが「珍シ」かったものとも推察される。白鬚社付近(図13 a 地点)の海沿いの旧道は「崖道」で、材木座海岸側からは小高い尾根を抜けると小坪漁港・小坪海岸に到る。

図表14 「鎌倉の主な別荘分布図」

鎌倉同人会、1919年11月5日発行¹⁵ 筆者赤線



その後、「飯島」について言及されるのが翌週9月10日の「飯島ニ赴キ白鬚明神ヲ望メル風光ヲ写ス」であった。その間、黒田は東京へ出かけて戻り(9月4日)、鎌倉にて「名越ヨリ大町ノ方へ散歩」し「午後五時頃ヨリ海岸ニテ景色ヲ描きはじめ(9月5日)、「海岸ニテ前日ノ作品ヲ修正ス 未成ラズ」とし(9月6日)、途中雨の中散歩に出るなどするが(9月7日)、「四時頃ヨリ海浜ニ出テ描ク 結果不十分ナリ」(9月9日)と記している。白鬚社を望むことができる描写位置は、海側をやや見下ろす高い位置の崖道からのものであろうと推定されたことから、写生地点を「海岸」「海浜」と表現するとは考え難く、この期間の取材地「海岸」「海浜」と白鬚社を望んだ「飯島」は別地点であろうと推測される。また、白鬚社を描いた翌11日には「海浜逍遙図ノ下絵」として別の絵を制作しており、9月13日には「夕刻飯島ノ茶店ニ画布ナド持込ム」として「キャンバス(画布)」を用意し、「飯島」での新たな制作に着手しているものと考えられることも踏まえ、「白鬚明神ヲ望メル風光ヲ写」した絵は、基本的には9月10日の「三時半」からごく短時間で速写的に仕上げられた可能性が推測された¹⁶。

黒田はその後、茶店に画布などを持ち込んだ13日の翌日から23日まで毎日飯島へ赴いている。

- 9月14日「四時頃ヨリ飯島ニ赴ク」
- 9月15日「四時過ヨリ飯島へ出掛ケ」
- 9月16日「四時半ヨリ同道飯島へ出向キ」

さらに、9月17日以降の日記にはしばしば同地で制作したことが示されている。

- 9月17日「午後二時過ヨリ洗濯女ノ図ヲ描ク 四時半ヨリ飯島ノ図ニ従事セリ」

9月18日「午前ヨリ午後ヘカケ昨日ノ洗濯図ヲ描ケリ」「四時頃ヨリ飯島へ出向ク」
 9月19日「十一時前ヨリ又洗濯図ヲ描ク」「飯島行等昨日ノ如シ」
 9月20日「午前ト午後ニ於テ洗濯及飯島ノ景ノ製作ヲナス」
 9月21日「三時頃ヨリ飯島」
 9月22日「午後三時ヨリ飯島へ出掛ケタリ 本日ニテト通塗了ル 明日ハ補筆ヲナス見込也」
 9月23日「十時過ヨリ洗濯ノ図ヲ描ク 午後モ三時頃迄同図ニ加筆セリ 四時ヨリ飯島へ出向キ 今日ニテト先描キ了リ額ヲ持チ帰ル」

以上のように、13日以降、23日までほぼ連日、午前から昼過ぎにかけて「洗濯女(洗濯)」の図、午後から夕刻にかけて「飯島」の図を同時進行で制作していたことがわかる。この「洗濯女(洗濯)」の図は、その画題に基づけば《磯の夕》と共に「国民美術協会 第1回西部展覧会」に出品された《洗濯》に当たるものであろう。以後、9月25日に「櫻井ニ飯島図ヲ持テ十時前ノ汽車ニテ帰京セシメ」とした後、10月4日の「国民美術協会 第1回西部展覧会」開催まで黒田が制作をした記述は日記にはない。

以上の状況を鑑みれば、1913年9月14日から23日の期間に、画布を支持体として主に夕刻に飯島にて制作された「飯島図」が《磯の夕》に該当し、《夕風》は、9月10日に短時間で描かれた作品と推定され、謂わば《磯の夕》のプロトタイプ的な小品として位置づけられる可能性が有力であると推測された。

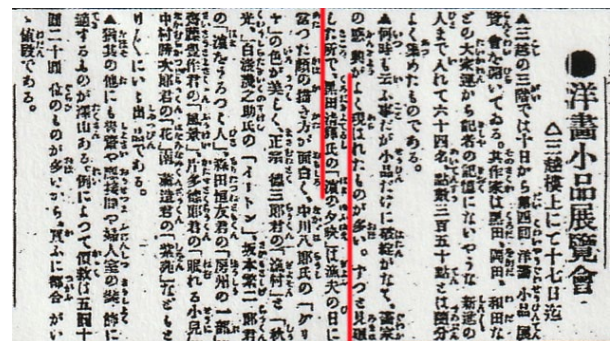
4. 出品歴の推定

4.1 三越呉服店「第4回洋画小品展覧会」

《夕風》は、黒田清輝作品の多くを収録した

『黒田清輝作品全集』¹⁷に掲載がなく、遺作展目録他主要な作品集等においてもその画像、タイトルともに確認ができなかったため、1913年9月以降、白鬚社を描いた後の黒田の展覧会歴について調査を行い、出品歴を探った。黒田は、1913年10月4日から「国民美術協会 第1回西部展覧会」に出品の後、11月1日から10日にかけて大阪三越にて開催の「第10回洋画展覧会」に「十余点」を出品したことが記録されている¹⁸。さらに、今回の調査で当時の三越呉服店の機関誌『三越』や新聞記事(図表15)から、11月17日まで東京・三越呉服店にて開催された「第4回洋画小品展覧会」にも出品していることが明らかとなった¹⁹。この三越呉服店での展覧会記録写真に《夕風》に酷似した作品が写されていたことが判明し、検証を進めた。

図表15 「●洋画小品展覧会」『読売新聞』
 1913年11月12日朝刊 筆者赤線

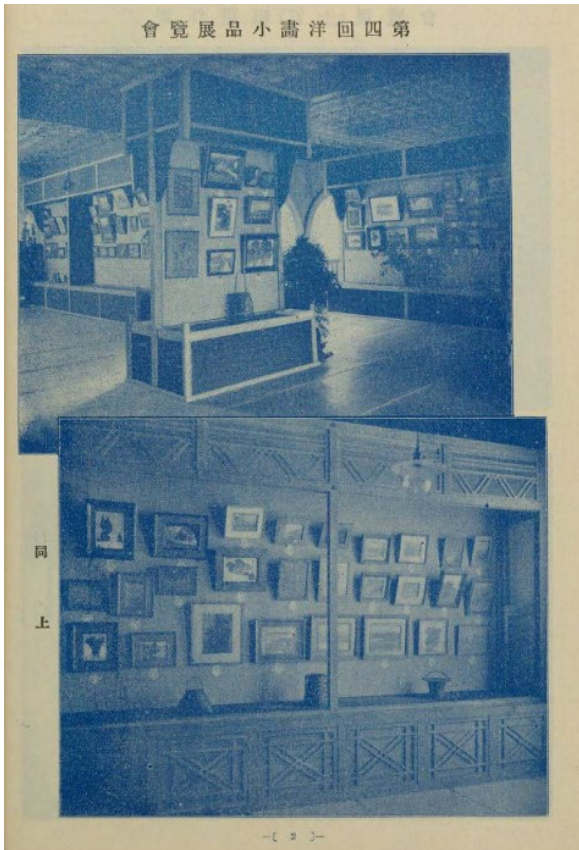


総勢64名、総出品数350点からなる「第4回洋画小品展覧会」に黒田も複数の作品を出品したものと考えられる²⁰。翌12月に発行された三越呉服店機関紙『三越 第3巻12号』には、「第4回洋画小品展覧会」出品作の一部図版と共に会場写真が掲載されている(図表16)。

図表16の下段会場風景写真を拡大鮮明化したところ、写真中の壁面、3段目中央左から4番目

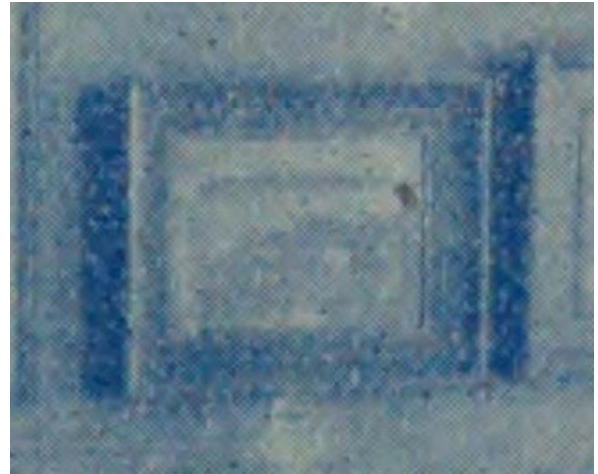
の作品が《夕風》と酷似していることが判明した。該当作品の絵の右上部にかかる黒い点は写真が青色の単色印刷であることから雑誌自体の汚れであることが分かる。

図表 16 「第四回洋畫小品展覽會」
会場風景と出品作品の一部

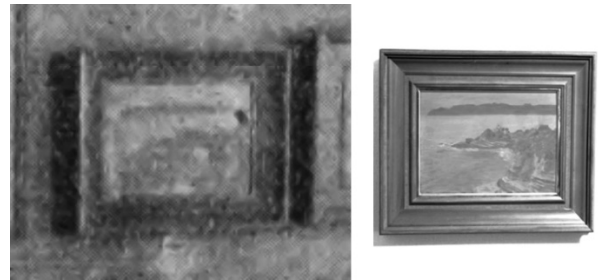


※右ページ中央左 黒田清輝《海邊の夕暮》

図表 17 「第四回洋畫小品展覽會」
会場風景写真部分拡大

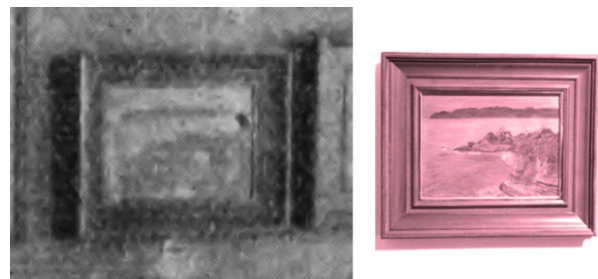


図表 18 「第四回洋畫小品展覽會」
会場風景写真部分拡大と《夕風》の比較

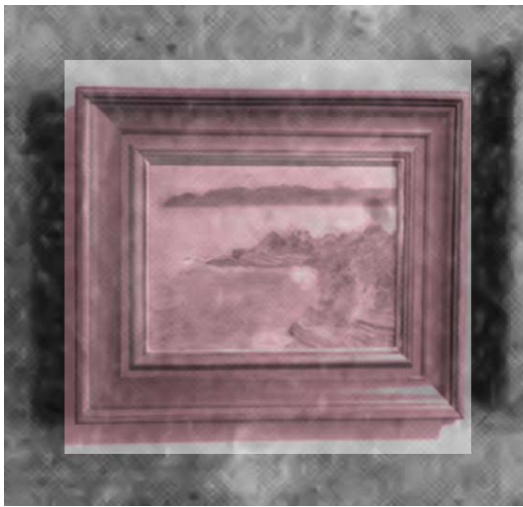


画像を白黒化し《夕風》(左)と並べて比較したところ(図18)、不鮮明ながら構図及び額の形状・大きさがほぼ一致しているように見える。比較のため加工し検証を行った。

図表 19 「第四回洋畫小品展覽會」会場風景写真
部分拡大と《夕風》(赤色化)の比較



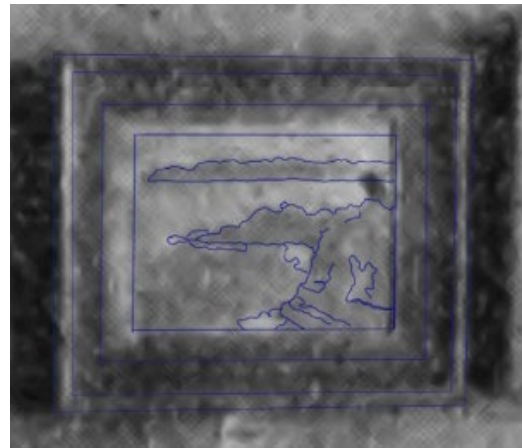
図表 20 「第四回洋畫小品展覽會」会場風景写真部分拡大と《夕風》(赤色化)の合成比較



《夕風》画像を赤色加工して半透明化し会場写真と重ねたところ、画面上の岬と海の面積、岩の形状、波のハイライト等の構図要素の位置関係、額縁の形状寸法がほぼ一致した(図表 19、20)。また、《夕風》の輪郭線を抽出し青色の線で示し、拡大写真と輪郭線を重ね合わせたところほぼズレなく一致した(図表 21)。

会場風景写真を元に、図表 15 の新聞記事傍線部の内容、図表 16 の出品作品写真等との情報の照合によって図表 22 「作品配置予想図」を作成した。

図表 21 「第四回洋畫小品展覽會」会場風景写真部分拡大と《夕風》の青色輪郭線による合成比較



図表 22 「第四回洋畫小品展覽會」作品配置予想図

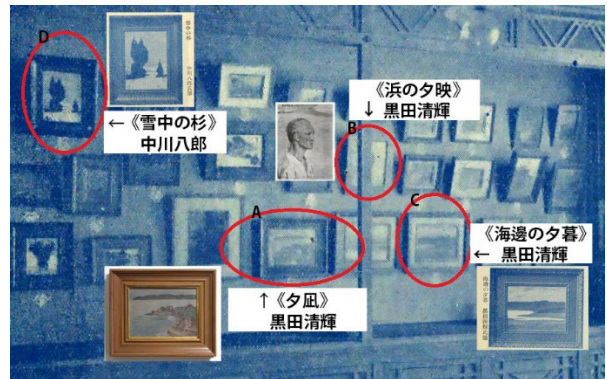
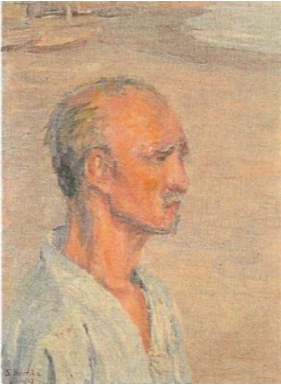


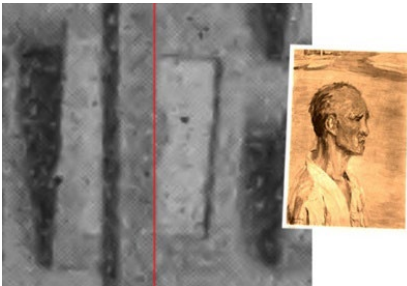
図 16 の『三越』出品作品画像から、D、Cは「中川八郎《雪中の杉》」、「黒田清輝《海邊の夕暮》」と推定、図表 15 の読売新聞記事より Bは「漁夫の日に当たった顔」を描いた《浜の夕映》(図表 23)²¹と推定した。《浜の夕映》の画寸は縦 331 ミリ、横 257 ミリで、《夕風》の画寸縦 245 ミリ、横 336 ミリとほぼ同寸であり、A=《夕風》と仮定した場合、AB の画寸の近似は写真でも確認できる。B は柱の陰ではっきりと見えないため、《浜の夕映》の画像を橙色に加工し角度を調整の上、合成検証を行い、サイズ、画面上の人物の位置、特徴的な漁夫の額から鼻梁までの輪郭などの要素が概ね一致した(図表 24、25)。このことから、壁面の中央部分には集中的に黒田清輝

の作品がかけられていたことが推察された。出品者中で長老格であった黒田作品の壁面写真を機関紙の会場風景の記録として選択した可能性も考えられる。

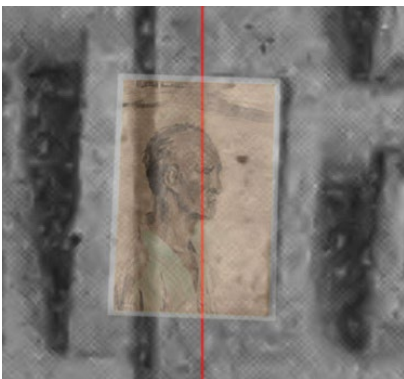
図表 23 黒田清輝《浜の夕映》1913年
府中市美術館蔵



図表 24 「第四回洋画小品展覧會」会場風景写真 部分拡大と《浜の夕映》(橙色化)の比較
赤線は柱の輪郭線



図表 25 「第四回洋画小品展覧會」会場風景写真 部分拡大と《浜の夕映》(橙色化)の合成比較



4.2 《浜の夕映》と《夕風》

1997年より府中市美術館の所蔵となっている《浜の夕映》は、館での購入時には既に図表 26 のような新しい額装が施されており²²、『三越』会場写真との比較は行えなかった。しかしながら、実見調査の結果、支持体板の裏側に《夕風》裏のものと同様の同寸の付箋が確認された(図 27)。画題の上に朱書きによる「209」の数字が記載されている以外は、文字寸、筆跡、落款共に同種であると見受けられた。

『府中市美術館所蔵品目録 2000』によれば、本作の展覧会出品歴として1914年の「第2回国民美術協会展」が示されている。《浜の夕映》の制作年は画面左下の年記からも「1913年」とされており、図表 15 の読売新聞記事に「漁夫の日に当たった顔」を描いた《浜の夕映》という作品が「第4回洋画小品展覧會」に出品されているとの記述があること、今回、作品裏に《夕風》と同種の付箋が確認されたことなどを考慮すれば、14年の「第2回国民美術協会展」に先立つ13年の「第4回洋画小品展覧會」にも《浜の夕映》が《夕風》とともに出品された可能性が推測された²³。

図表 26 《浜の夕映》額装



図 27 《浜の夕映》《夕風》裏面付箋の比較



4.3 黒田清輝と三越呉服店「洋画小品展覧会」

これまで多く言及されてこなかった黒田清輝の三越呉服店における「第4回洋画小品展覧会」への出品について調査する過程で、黒田と三越呉服店との関係が次第に明らかとなった。詳細は今後の更なる研究課題とし、ここでは「洋画小品展覧会」開催の背景及び経緯を中心に調査結果を概略として事実を列挙しておく。

アメリカやヨーロッパのデパートを経営モデルとして研究を進め、1904年に近代的小売業への転換を目指して呉服商から百貨店へと組織改革をした株式会社三越呉服店。その専務取締役であった日比翁助は、「学俗共同」（学問に精(くわ)しく文芸美術に秀づる碩学天才の協力を得て、商業に携わる者が経営を行うの意²⁴）をポリシーに、文化人の集まりである「流行会」を組織したが、黒田清輝はそのメンバーとして三越呉服店と関わりがあった。また、1907年に大阪支店に設置された現存作家の作品を取り扱う「新美術（古美術の対義的語として当代の作品を指す）部」の主任となった北村直次郎（鈴菜）はその設立時から黒田とは深い交流があったとされる²⁵。

はじめは、京都画壇の日本画家の作品を手頃な価格で展示即売した「新美術部」の販売手法は、注文製作がメインであった当時において、消費者が作品を選んで購入できるという画期的なシステムであった。1907年は、黒田の尽力もあって文部省美術展覧会（文展）が開設された年でもあり、文展開催により美術愛好者は増大し、「床の間を飾る道具」としての美術品だけではない、

「鑑賞を目的とする美術品との接し方を日本人に広めていくことになった」ともされ、百貨店の美術部は「文展の副産物」などともその関係性が指摘されている²⁶。

当時まだ新たなジャンルであった「洋画」は、作品発表の場が限られていたが、三越呉服店では、これを西欧由来の百貨店のイメージに華を添えるものとして、また、洋画需要の高まりを予見して展示することが試みられ²⁷、まずは大阪支店で1909年に「第1回洋画展覧会」が開催された。メンバーは東京・太平洋画会と京都・関西美術院から選抜され、続く第2回展では黒田清輝の監査によって白馬会会員によるものとなっている。

これらの展覧会は大成功し、翌年には東京でも「第1回洋画小品展覧会」が開催され、会期の半ばには3分の1以上の作品が売約するほどの盛況ぶりであったという²⁸。洋風住宅の増加も相まって洋画人気は高まり、安価で小さな作品が住環境的にも好まれ、三越呉服店の美術部の活動はますます飛躍していった。この後、多くの百貨店では次第に「新美術（新派）」の作品が主に扱われるようになっていき、廣田孝はこの動向について、「百貨店が一般市民を対象にして新派の美術市場を開拓していった過程とみなすことも出来る。(略)値段を公示するということは価格という共通の評価基準によって、わかり難い画家の評価を価格という数字で明快にしめたことになる」など

とも指摘している²⁹。

三越呉服店における「洋画小品展覧会」は、我が国における一般への洋画普及と市場開拓の一端を担う、重要な役割をもった意義深い展覧会のひとつだったのである。

5. おわりに—《夕風》の調査を終えて

この度の調査により、《夕風》は1913年9月10日に、現在の神奈川県逗子市小坪5丁目付近の旧崖道から白鬚社と飯島の集落を写生し描いた作品であり、同1913年11月10日より17日まで三越呉服店で開催された「第4回洋画小品展覧会」に出品されたものであることが推定された。

同年の「国民美術協会 第1回西部展覧会」に出品された《磯の夕》に連なる作品として描かれたと推測される本作は、《磯の夕》が失われた今日において、その姿をイメージする手がかりとして重要な作例であろう。また同時に、関東大震災により消失してしまった在りし日の白鬚社周辺の風景を今に伝える貴重な歴史的記録ともいえるのではないか。

石井柏亭が《磯の夕》を「作爲なき實寫」と評したように、黒田は生涯で数多くの素直な写生作品を残した。そこには、「どうしても型にならぬやうに、自分の歡察で矢張り自然中の或る妙味と思ふ處を現さねばならぬ、妙味の存する所を、自分の思想の代表者とするのが今日の理想である」³⁰と述べた彼の真摯な作画姿勢が表れている。

黒田夫人照子氏の回想によれば、照子氏が外出のために着替えた和装姿を見かけて「『これを勉強するから』と行って」その姿を描くなど、黒田は「いろいろ頭の中で考えて描くというより、なにか見かけて、それをすぐ描くということが多かった」という³¹。この証言からも分かるように、折々の感興に心動かされるままに、自然の観察によって絵画を探求する勤勉な態度で、黒田は終生

制作に努めたのである。

自身は「他人の作によって自然を見る事はせず、「自然に依って」「自然の中の或る趣味を描き頭はす事に力めて居る」と語り³²、観察を重視し、画家一人一人の自由な自己表現を重んじて作品を描き、その重要性を説き続けた。こういった個性への開眼の必要性を示し続けることこそが、近代日本において、黒田清輝という画家が貫いたひとつの開明性であったともいえるのではないのだろうか。

《夕風》によって描き出されているのは、珍しく訪れたという崖道で出会った夕暮れの消えかかる淡い光に浮かび上がる、風静まる海と小さな漁村の営みの何気ない情景であり、そこに興味を覚えて見つめる黒田自身の眼差しそのものでもあるのだろう。その画面はまさに、「何れの處にしても一刹那の面白味に何とも云へぬ愉快的な感じを起す、斯る場合を多く畫にする。之れは豫め頭腦に鍊った繪畫ではなく、其の時其の時に依つて動かされた感じである。之を多く繪畫にする」³³という彼自身の言葉の意図するところを、何よりも如実に示しているように思われる。

謝辞

本論作成にあたり、逗子市教育委員会社会教育課長 佐藤仁彦氏、府中市美術館学芸員 小林真結氏、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化財情報資料部長 塩谷純氏 の各氏には貴重な資料をご提供いただき、多大なご助言を頂戴いたしました。付記し心より御礼申し上げます。

注釈

- 1 原田実編（1968年）『日本の美術 10 明治の洋画』至文堂、pp63
- 2 黒田清輝作品の所定鑑定機関・一般財団法人東美鑑定評価機構鑑定委員会発行の令和4年8月25日付鑑定証書による
- 3 黒田清輝(1966年)『黒田清輝日記』中央公論美術出版
- 4 谷謙二「今昔マップ」、<https://ktgis.net/kjmapw/>、2022年9月2日最終閲覧より引用作成
- 5 荒井友三郎編(1928年)『逗子町誌』逗子町
- 6 図は逗子市教育委員会社会教育課長 佐藤仁彦氏の提供による
- 7 青木茂監修、東京文化財研究所編纂（2003年）『近代日本アート・カタログ・コレクション 056 国民美術協会第1巻(大正2年～昭和8年)』ゆまに書房、「国民美術協会 第1回西部展覧会作品集」より転載
- 8 東京国立博物館、東京文化財研究所他編（2016年）「特別展 生誕150年 黒田清輝—日本近代絵画の巨匠」(展覧会図録) 美術出版社より転載
- 9 黒田による加筆については注3前掲書1917年9月22日の記述及び塩谷純「《栗拾い》解説文」注8前掲書pp247による
- 10 坂井犀水（1937年）『黒田清輝』聖文閣、「中央美術」十ノ九 pp187-188
- 11 塩谷純「《鎌倉にて(初更の田舎、菜種、小壺にて)》解説文」注8前掲書pp256
- 12 注4同上より引用作成
- 13 日記によれば、「乱橋」付近に別荘を有した11年から「珍シク」小坪方面へ出かけた13年9月3日までの鎌倉滞在中「小坪」方面に赴いたという記述は、散歩等で小坪地区を経由したという内容も含め12年1月6日、8日●、9日●、12

日、13年1月19日、20日○、2月5日、9月3日の8箇所、13年夏の滞在(8月6日～)では9月3日が最初である。●○印の日は、●「小坪街道」○「小坪ノ崖道」にて制作したとしている

14 日記によれば、1911年12月31日時点で黒田は「乱橋」付近に借家しており、後にここが「町田氏」(姉・千賀の嫁先橋口文蔵家の娘婿・町田咲吉と思われる)の占領するところとなったため、翌12年末から新たに「同邸内ナル」「家賃一ヶ月金八円」の「往来際ノ小屋」を「橋口家」の紹介で借家したとしている。13年1月6日には空き寺の「啓運寺」を「吾借家ト四目垣ヲ隔テタルノミノ隣家」であるとしてアトリエに借用していることから、この時点での別荘を「啓運寺」付近と推定した。同寺の地所を借地し翌1914年に別荘「奏笙軒」(現・鎌倉市材木座1丁目10-24)を新築している

15 地図は島本千也（1993年）『鎌倉別荘物語-明治・大正期のリゾート都市-』島本千也より転載

16 1913年10月20日の日記には東京にて「午後三時過ヨリ小品風景画ニ加筆ス」とあり、10月14日には「作品ノ補筆落款ヲナス」とあることから、黒田はしばしば何らかの作品に後日加筆を行っていることがわかる。9月9日に「結果不十分ナリ」とした作品も後に完成したかもしれない

17 和田英作編(1925年)『黒田清輝作品全集』審美書院

18 調査では、『三越』『読売新聞』他、当時東京付近で発行されていた新聞(毎日新聞、朝日新聞、都新聞、中外商業新報、日本、東京毎日新聞、時事新報、国民新聞、二六新報、婦女新聞)を確認した。結果、毎日新聞以下5紙は展覧会紹介のみ、東京毎日新聞以下5紙は展覧会記事が掲載なく、最も詳細な記事が図15の読売新聞記事であり、その他に黒田清輝の出品作品の題名を記載している詳細な記事は見つかりできなかった。詳細

な評伝である隈元謙次郎著『黒田清輝』（1966年、日本経済新聞社）の内、1913年の黒田の動向を述べた文中に「土用波」「春の野辺」「秋の山路」「夏の海辺」「薔薇と画筆」「浜の丘」など十余点を出品した」とある。また、『大阪毎日新聞』（1913年11月5日朝刊）記事「●三越洋画展覧会」には「第10回洋画展覧会」は「旧白馬会系の画家の作品二百十余点を陳列」したもので、その内で黒田は「最も多数を出品し「紅白の躑躅」「雪中の村社」「庭前日向」その他何れも傑出してゐる」と記載されている。『黒田清輝日記』では同年10月13日の項に「大阪三越送ノ事務ヲ執リ」とはあるが、三越呉服店の展覧会について記述はない

19 「第4回洋画小品展覧会」については、前出の隈元謙次郎著『黒田清輝』にも一切記載がなく他の情報が発見できなかったため

20 会期直前に催された大阪三越での類似した規模の「三越洋画展覧会」に「十余点」を出品していることから、三越呉服店での「第4回洋画小品展覧会」にも同様に多数出品していたものと推測

21 府中市美術館編（2000年）『府中市美術館所蔵品目録2000』府中市美術館より転載

22 府中市美術館学芸員 小林真結氏による見解

23 注21前掲書における展覧会歴の出典となっている隈元謙次郎著『黒田清輝 近代の美術6』

（1971年、至文堂）には「1914年の国民美術協会第2回展に出品した」と説明が付されているが、筆者である隈元は、前出の評伝『黒田清輝』や引用書籍の年表内でも「第4回三越洋画小品展覧会」について記述しているものが確認できなかった。また、「第2回国民美術協会展」の出品目録は、国民美術協会の展覧会カタログを網羅した注7前掲書などにも掲載されておらず、現時点でその内容が確認できないため出品作品については不明である。日記によれば、1913年8月17日、

30日の項に「夕刻東子ト共ニ漁夫ヲ海浜ニテ描写ス」「夕五時頃ヨリ東子ト海辺ニテ漁夫ヲ描ケリ」とあり、この際に制作されたものが《浜の夕映》であるかもしれない

24 和田博文(2020年)『三越誕生！：帝国のデパートと近代化の夢』筑摩書房、pp19

25 月刊美術編集部(2007年)「美とまごころの100年 三越美術部の軌跡 時代を彩った展覧会（第二章）「洋画小品展覧会」百貨店と洋画を結んだ、白馬会の画家たち」『月刊美術33(3)』サンアート、pp110

26 神野由紀(2005年)『百貨店で〈趣味〉を買う：大衆消費文化の近代』吉川弘文社、pp80
「文展の副産物」との文言は、文中の北澤憲昭の指摘による

27 注25前掲書 pp110

28 注25前掲書 pp110

29 廣田孝(2006年)「明治期の百貨店主催の美術展覧会について—三越と高島屋を比較して」『デザイン理論』意匠学会、pp56-57

30 黒田清輝、東京文化財研究所編(2007年)「自然に對する態度」（『日本及日本人』507明治42年4月）『黒田清輝著述集』中央公論美術出版、pp467

31 塩谷純「《婦人肖像》解説文」注8前掲書 pp238、照子氏の回想は「なつかしい絵のかずかず 亡夫清輝の思い出」『日本経済新聞』1965年10月27日記事による

32 注30前掲書 pp468

33 注30前掲書 pp468

参考文献

[1] 原田実編（1968年）『日本の美術10 明治の洋画』至文堂

[2] 黒田清輝(1966年)『黒田清輝日記』中央公論美

術出版

- [3] 谷謙二(2017年)「『今昔マップ旧版地形図タイトル画像配信・閲覧サービス』の開発」『GIS-理論と応用 25(1)』 pp1-10
- [4] 荒井友三郎編(1928年)『逗子町誌』逗子町
- [5] 青木茂監修、東京文化財研究所編纂(2003年)『近代日本アート・カタログ・コレクション 056 国民美術協会第1巻(大正2年～昭和8年)』ゆまに書房
- [6] 東京国立博物館、東京文化財研究所他編(2016年)「特別展 生誕 150年 黒田清輝—日本近代絵画の巨匠」(展覧会図録) 美術出版社
- [7] 坂井犀水(1937年)『黒田清輝』聖文閣
- [8] 島本千也(1993年)『鎌倉別荘物語-明治・大正期のリゾート都市-』島本千也
- [9] 隈元謙次郎(1966年)『黒田清輝』日本経済新聞社
- [10] 和田英作編(1925年)『黒田清輝作品全集』審美書院
- [11] 笠原健一編(1913年)『三越 第3巻12号』三越呉服店
- [12] 「●洋画小品展覧会」『読売新聞』、朝刊、1913年11月12日
- [13] 「●三越洋画展覧会」『大阪毎日新聞』、朝刊、1913年11月5日
- [14] 府中市美術館編(2000年)『府中市美術館所蔵品目録2000』府中市美術館
- [15] 隈元謙次郎(1971年)『黒田清輝 近代の美術6』至文堂
- [16] 和田博文(2020年)『三越誕生! : 帝国のデパートと近代化の夢』筑摩書房
- [17] 月刊美術編集部(2007年)「美とまごころの100年 三越美術部の軌跡 時代を彩った展覧会 (第二章)「洋画小品展覧会」百貨店と洋画を結んだ、白馬会の画家たち」『月刊美術 33(3)』サンアート、pp110-112
- [18] 神野由紀(2005年)『百貨店で〈趣味〉を買う: 大衆消費文化の近代』吉川弘文社
- [19] 廣田孝(2006年)「明治期の百貨店主催の美術展覧会について—三越と高島屋を比較して」『デザイン理論』意匠学会、pp47-60
- [20] 黒田清輝、東京文化財研究所編(2007年)『黒田清輝著述集』中央公論美術出版